

加古川市学力向上推進プラン

～「協同的探究学習」を核とした学びの質を高める授業改善～



令和3年4月

加古川市教育委員会

加古川市学力向上推進委員会

目次

1	学力向上推進プラン策定にあたって	1
2	本市学力向上推進取組の現状から	2
3	学習指導要領改訂の基本方針について	8
4	本市児童生徒に身に付けさせたい「確かな学力」	9
5	かこがわ教育ビジョンと加古川市学力向上推進プランとの関連	11
6	目指す子どもの姿	
	(1) 学びが自分の将来とつながっていると実感し、主体的に学びに向かう子ども	12
	(2) 生きて働く知識・技能を身に付けた子ども	13
	(3) 多様な意見・考えや既有知識と関連づけて、さらに深い学びへつなげる子ども	14
7	重点取組1 「わかる学力」の育成に向けた協同的探究学習	15
8	重点取組2 超スマート社会を生き抜く力を育む ICT の活用	17
9	重点取組3 グローバル時代を生き抜く英語力の育成	19
10	児童生徒の学びを支える環境づくり	
	(1) 家庭との連携	21
	(2) 読書習慣の定着に向けた環境づくり	22
	(3) 組織的な研究・研修体制の構築	23

1 学力向上推進プラン策定にあたって

1 2030年の社会を担う児童生徒の未来

人工知能（AI）の発達や超スマート社会（Society5.0）の到来など、情報技術の飛躍的な進化を背景として、あらゆる分野でのつながりが国境等を越えて、多様な人々や地域間が緊密につながる状況が進展しています。このような社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきており、このことは全ての子どもたちの生き方にも影響を及ぼすものとなっています。

国においては、2030年以降の社会を展望した教育施策の重点事項を「第3期教育振興基本計画」において示すとともに、平成29年には、幼稚園教育要領や小学校・中学校学習指導要領等を告示しました。それらの前文では、「これからの幼稚園・学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」とされ、これからの学校に求められることや、これから育てるべき児童生徒の姿について示されています。

本市においては、4年後を想定した基本構想である教育振興基本計画「かこがわ教育ビジョン」を策定しています。そこには、「『つながり』が教育の土台となる」との考えが掲げられ、子どもたちの笑顔が常に絶えない、希望と優しさに満ちた豊かな社会の実現を願い取組を進めることとしています。

2 「学力向上推進プラン」における今後4年間の役割

全国学力・学習状況調査結果において、小中学校で一定の成果が、目に見える形で表れてきています。一方で、目的や意図に応じて、資料を基に自分の考えを書いたり、資料の傾向を捉え、判断の理由を説明したりする「思考力・判断力・表現力等」に課題が見られ、今後取り組むべき方向も見えてきました。

また、2017年告示の学習指導要領において、今後の知識基盤社会に向けて、「思考力・判断力・表現力等」を中心とした学力向上のために、「主体的・対話的で深い学び」による授業が重視されることとなりました。

そこで、「思考力・判断力・表現力等」の向上に加えて学習内容を深く理解する力を育む「協同的探究学習」を核とした学びの質を高める授業改善に取り組み、「主体的・対話的で深い学び」を具現化し、児童生徒の学力向上を図ってまいります。

今後、計画推進の4年間を見通した「学力向上推進プラン」は、その成果と課題を把握しながら改訂作業を行うなど、学習指導要領の着実な展開を推進していきます。

あわせて、これまで「中学校区連携ユニット12」を中心にして培ってきた、学校や家庭・地域、関係機関の連携体制をさらに進めながら、本市ならではの「社会に開かれた教育課程」の実現を目指します。

また、一人一台の端末整備が完了し、令和3年度からは、ICTを活用した授業改善が求められています。

子どもたちが生きる社会の未来を、子どもたち自身が創り上げていくために必要とされる資質・能力を見据え、学校・家庭・地域が一体となって取組を進めてまいります。

2 本市学力向上推進取組の現状から

(1) 全国学力・学習状況調査における児童生徒の学力状況 (平成29年度から平成31年度の3年間)

<小学校平均正答率>

		国語		算数		理科
平成 29年度	本市	A:74%	B:57%	A:77%	B:45%	
	全国	A:74.8%	B:57.5%	A:78.6%	B:45.9%	
平成 30年度	本市	A:69%	B:54%	A:61%▼	B:51%	60%
	全国	A:70.7%	B:54.7%	A:63.5%	B:51.5%	60.3%
平成 31年度	本市	60%▼		66%		
	全国	63.8%		66.6%		
	記述式	市 54.2%▼ (全国 57.6%) 3問		市 47.4% (全国 47.4%) 4問		
	選択式	市 71.8%▼ (全国 75.1%) 7問		市 75.2% (全国 75.7%) 5問		

<中学校平均正答率>

		国語		数学		理科	英語
平成 29年度	本市	A:78%	B:72%	A:66%	B:47%		
	全国	A:77.4%	B:72.2%	A:64.6%	B:48.1%		
平成 30年度	本市	A:76%	B:60%	A:67%	B:46%	66%	
	全国	A:76.1%	B:61.2%	A:66.1%	B:46.9%	66.1%	
平成 31年度	本市	72%		60%			57%
	全国	72.8%		59.8%			56.0%
	記述式	市 74.3%▼ (全国 76.5%) 3問		市 45.0%▼ (全国 47.1%) 4問			市 5.5% (全国 6.8%) 3問
	選択式	市 73.5% (全国 73.6%) 6問		市 59.6% (全国 60.3%) 5問			市 72.3% (全国 71.4%) 13問

<記述式問題における無解答率>

		小学校				中学校			
		国語		算数		国語		数学	
平成 29年度	本市	3問	8.6%	5問	9.3%	3問	11.5%▼	5問	30.7%▼
	全国		8.3%		9.5%		9.2%		25.2%
平成 30年度	本市	3問	5.3%	5問	11.4%	3問	12%▼	5問	27.8%▼
	全国		6.9%		12.4%		8.4%		22.9%
平成 31年度	本市	3問	8.6%	4問	5.3%	3問	8.1%	4問	21.6%▼
	全国		7.7%		5.8%		6.2%		17.1%

※平成29年度から市町の平均正答率は整数値(小数第1位を四捨五入した数値)で公表している。
 ※全国平均と比較して±2ポイントまでを同程度とし、2ポイント以上を△、2ポイント以下を▼と示す。

◆ 3年間の全国学力・学習状況調査における児童生徒の学力状況と今後の方向性

<学力状況>

- ・全国学力・学習状況調査における3年間の本市児童生徒の平均正答率を見ると、市全体では全国平均と同程度を示しているが、年度や教科において、一部課題となる部分が見られる。
- ・国語における平均正答率は、平成31年度小学校国語において全国平均を下回っており、無解答率も多くの問題で全国平均よりも高くなっている。また、「話すこと・聞くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の3つの領域に関する問題で平均正答率が全国平均を下回っている。
- ・算数／数学における平均正答率は、小学校算数A問題において、全国平均と同程度であり、若干ではあるがやや低い傾向にある。しかし、中学校数学A問題において、全国平均と同程度であり、若干ではあるがやや高い傾向が続いている。
- ・理科における平均正答率は、全国平均と同程度である。また、英語における平均正答率も全国平均と同程度である。
- ・全国と同様に、「B問題」と「記述式」の問題に課題が見られる。
- ・記述式問題における無解答率は、改善傾向が見られるが、中学校数学において、全国平均よりも高くなっている。

<今後の方向性>

- 小中9年間を通して、系統的・計画的に一層の授業改善を図り、児童生徒のつまづきを解消しながら、「できる学力」の定着を図る。
- 多様な考えが可能な問題提示を行い、個々に思考を深める時間を確保し、思考の過程を自分の言葉で表現するなど、児童生徒の「わかる学力」のさらなる育成に向けた協同的探究学習の理念に基づく授業実践を行う。
- 協同的探究学習を通して、粘り強く学習に取り組む態度を育むことにより、最後まであきらめず問題解決する力を育成する。
- 児童生徒が、思考の過程を図や資料などを使いながら説明したり、自分の考えを論理的に文章に書いたりするなど、授業等の中で話す活動や書く活動を充実させる。
- 既有知識や教科横断的な知識を関連づけながら解法を導き出す機会を設ける。

(2) 平成31年度 全国学力・学習状況調査における児童生徒質問紙と平均正答率のクロス集計による児童生徒の学力・学習状況

①課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか

- ・上段…「当てはまる」と回答した児童生徒（小：36.3%、中：29.6%）の平均正答率
- ・下段…「当てはまらない」と回答した児童生徒（小：3.6%、中：5.3%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
66.1%	ポイント差	70.7%	ポイント差
46.1%	20.0	50.3%	20.4

<中学校>

国語		数学		英語	
78.5%	ポイント差	70.1%	ポイント差	62.9%	ポイント差
63.1%	15.7	45.2%	24.9	45.9%	17.0

⇒ **本市の傾向**

- ・課題や問題解決に向けて主体的に取り組む児童生徒ほど、学力は高い傾向がある。

②授業で学んだことを、他の学習に生かしていますか

- ・上段…「当てはまる」と回答した児童生徒（小：40.7%、中：26.5%）の平均正答率
- ・下段…「当てはまらない」と回答した児童生徒（小：2.8%、中：4.2%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
64.4%	ポイント差	69.7%	ポイント差
51.5%	12.9	54.2%	15.5

<中学校>

国語		数学		英語	
76.9%	ポイント差	68.3%	ポイント差	62.3%	ポイント差
62.9%	14.0	43.9%	24.4	46.2%	16.1

⇒ **本市の傾向**

- ・学んだことを他の学習に生かそうとしたり、本質を理解して様々な知識を関連づけて考えようとする児童生徒ほど、学力は高い傾向がある。

③-1 国語の問題について、解答を文章で書く問題がありましたが、どのように解答しましたか

- ・上段…「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童生徒（小：81.5%、中：76.5%）の平均正答率
- ・下段…「書く問題は全く解答しなかった」と回答した児童生徒（小：1.0%、中：2.6%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
64.8%	ポイント差	69.2%	ポイント差
27.6%	37.2	40.1%	29.1

<中学校>

国語		数学		英語	
78.3%	ポイント差	66.1%	ポイント差	60.3%	ポイント差
37.0%	41.3	27.6%	38.5	36.9%	23.4

③-2 算数（数学）の問題について、言葉や数、式を使って（小：わけや求め方などを書く問題）（中：説明する問題）がありましたが、どのように解答しましたか

- ・上段…「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童生徒（小：81.8%、中：57.3%）の平均正答率
- ・下段…「書く問題は全く解答しなかった」と回答した児童生徒（小：1.1%、中：4.5%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
64.5%	ポイント差	69.9%	ポイント差
30.2%	34.3	35.2%	34.7

<中学校>

国語		数学		英語	
78.6%	ポイント差	72.1%	ポイント差	63.1%	ポイント差
52.3%	26.3	25.8%	46.3	39.1%	24.0

⇒ **本市の傾向**

- ・根拠や理由を書こうと最後まで粘り強く努力したり、言葉や数、式などを使って自分の考えを表現したりした児童生徒ほど、学力は高い傾向がある。

④家の人（兄弟姉妹を除く）と学校での出来事について話をしますか

- ・上段…「している」と回答した児童生徒（小：55.7%、中：47.2%）の平均正答率
- ・下段…「全くしていない」と回答した児童生徒（小：4.7%、中：4.8%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
63.1%	ポイント差	67.6%	ポイント差
45.5%	17.6	53.4%	14.2

<中学校>

国語		数学		英語	
75.3%	ポイント差	63.9%	ポイント差	59.4%	ポイント差
59.4%	15.9	45.9%	18.0	45.8%	13.6

⇒ **本市の傾向**

- ・各家庭において、学校での出来事について話をし、保護者と対話を行う児童生徒ほど、学力は高い傾向がある。

<今後の方向性>

- 児童生徒が意欲をもって主体的に取り組み、自分自身の知識や他者の知識を関連づけながら考えを構成していくことや、その思考プロセスを表現し、他者と共有する学習・授業づくりを行う。
- 児童生徒一人一人が目的意識をもって課題に取り組み、個別に思考を整理して表現させる機会を設ける。
- 教師の専門性を発揮し、各教科等の単元及び本時の本質を捉え、児童生徒の思考の流れに応じた課題（発問）を工夫する。
- 児童生徒が理解した学習内容を、次の学習や他の学習、日常生活における様々な経験、人生や社会の在り方と結び付けて、さらに深く理解できるような授業づくりを行う。
- 学校での学びを家庭と共有し、家庭の協力を得ながら学力向上を目指す必要がある。

(3) 協同的探究学習パイロット校（平岡南小学校・中部中学校）における2年間（平成30・31年度）の全国学力・学習状況調査及び授業等から見られる成果と傾向

協同的探究学習パイロット校において見られた成果

- 「目的に応じて読む力」「根拠を明確にして記述する力」が高くなった。
- 無解答率が低くなり、最後まで粘り強く取り組む児童生徒が増えた。



これまでの全国学力・学習状況調査において課題とされてきた「思考力・判断力・表現力等の向上」「記述式問題において無解答率の高さ」の改善が見られた。

□国語

<調査における成果>

- ・「話し合いの参加者として、質問の意図を捉える」問題（H30）、「話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って、自分の理解を確認するための質問をする」問題（H31）は、全国と比較して平均正答率が高い。
- ・「質問の意図を捉える」問題（H30）、「相手に分かりやすく伝わる表現について理解する」問題（H31）は、全国と比較して平均正答率が高い。
- ・「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで読む」問題（H30）、「目的に応じて、本や文章全体を概観して効果的に読む」問題（H31）は、全国と比較して平均正答率が高い。

<授業等において見られる成果と傾向>

- 学級全体で行う協同探究場面を様々な教科・授業で設定し、個人が深める展開問題を工夫することで、児童生徒は、自分の考えを伝えるだけでなく、友だちの意見を聞きながら、さらに自分の考えを再考して伝えるなど、自分の考えと友だちの意見を関連づけながら整理して発言できるようになってきている。
- 他者の意見を的確に理解し、自分の考えを分かりやすく表現するなど、コミュニケーション能力が向上している。
- 教科書教材だけでなく、その他の書籍や資料を、児童生徒自ら整理しながら読み取り、本質を捉えようとする姿が見られる。

□算数／数学

<調査における成果>

- ・「折り紙の枚数が100枚あれば足りる理由を、示された数量を関連づけ、根拠を明確にして記述できる」問題（H30）、「示された減法に関して成り立つ性質を基にした計算の仕方を解釈し、適用することができる」問題（H31）は、全国と比較して平均正答率が高い。
- ・「事象を理想化・単純化することで表された直線のグラフを事象に即して解釈することができる」問題（H30）、「グラフから必要な情報を読み取り、事象を数学的に解釈することができる」問題（H30）、「総合的・発展的に考察し、得られた数学的な結果を事象に即して解釈することができる」問題（H31）は、全国と比較して平均正答率が高い。

<授業等において見られる成果と傾向>

- 多くの教科で協同的探究学習の理念に基づく授業づくりを行うことで、事象の変化や数量の関係を把握し、自ら筋道立てて考え、多様な表現を用いて、他者の考えと自分の考えの異同を考察したり、複数の解決のアイデアに基づいて、よりよい解決を求めて考えを統合したりする力が身に付いてきている。
- グラフから必要な情報を読み取ったり、数式から考察したり、数学的な見方や考え方を働かせ、様々な事象を数学的に解釈することができる力が身に付いてきている。
- 算数／数学の授業においても、様々な事象を多様に考えさせる授業づくりを行うことにより、「わかる学力」の向上が見られる。

□解答状況における成果

<調査における成果>

- ・小学校における2年間の調査（H30 国語 B・算数 B、H31 国語・算数）では、全国と比較して半数の問題で無解答率が低くなっている。（24 題／全 46 題）
- ・小学校算数調査（H31）では、無解答率が 0%になっている問題が 6 題（全 14 題）あった。さらに、短答式の問題でも 2 題、無解答率が 0%になっている。
- ・中学校における2年間の数学調査（H30 数学 B、H31 数学）では、全国と比較して半数近くの問題で無解答率が低くなっている。（14 題／全 30 題）
- ・中学校国語調査（H31）では、無解答率が 0%になっている問題が 6 題（全 10 題）あった。

<解答状況から見られる成果と傾向>

- 難しい問題にもあきらめずに主体的に取り組む児童生徒が多くなっている。
- 主として活用に関する調査においても、既存知識や問題内容等に関連づけながら、自分の考えを整理して解答しようとする児童生徒が多くなっている。

（4）平成 31 年度 実践協力校（鳩里小学校）における「数学的思考に関する記述型調査」結果の藤村教授による分析

<成果が見られた調査問題>

- ・「式が 6×4.5 で表されるような文章題を考えて記述する」乗法作問問題、「3 km を 48 分で歩く子どもと 4 km を 72 分で歩く子どもの速さを比較し、判断と理由を記述する」速度比較課題では、国内公立小学校 6 校の平均正答率より高い。

<結果分析から見られる成果と傾向>

- 協同的探究学習に取り組んでいない他の自治体の公立小学校に比べ、良好な結果である。
※藤村教授が研究授業等に対して指導助言を行っている学校、調査研究等に関わっている一部の自治体や学校の内、公立小学校 6 校と比較している。
- 無解答率が低く、自分の考えを肯定的に捉え、表現しようとする児童が多い。
- 記述内容から、自分の言葉で記述する児童が多く見られる。

3 学習指導要領改訂の基本方針について

1 改訂の基本的な考え方

これまでの学校教育の実践や蓄積を生かし、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成する。

知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視する平成20年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成する。

2 育成を目指す資質・能力

予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを發揮できるようにしていくことが必要とされた。また、汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ、知識・技能と思考力・判断力・表現力等をバランスよく育成してきた我が国の学校教育の蓄積を生かしていくことが重要とされた。

このため「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、以下の三つの柱に再整理された。

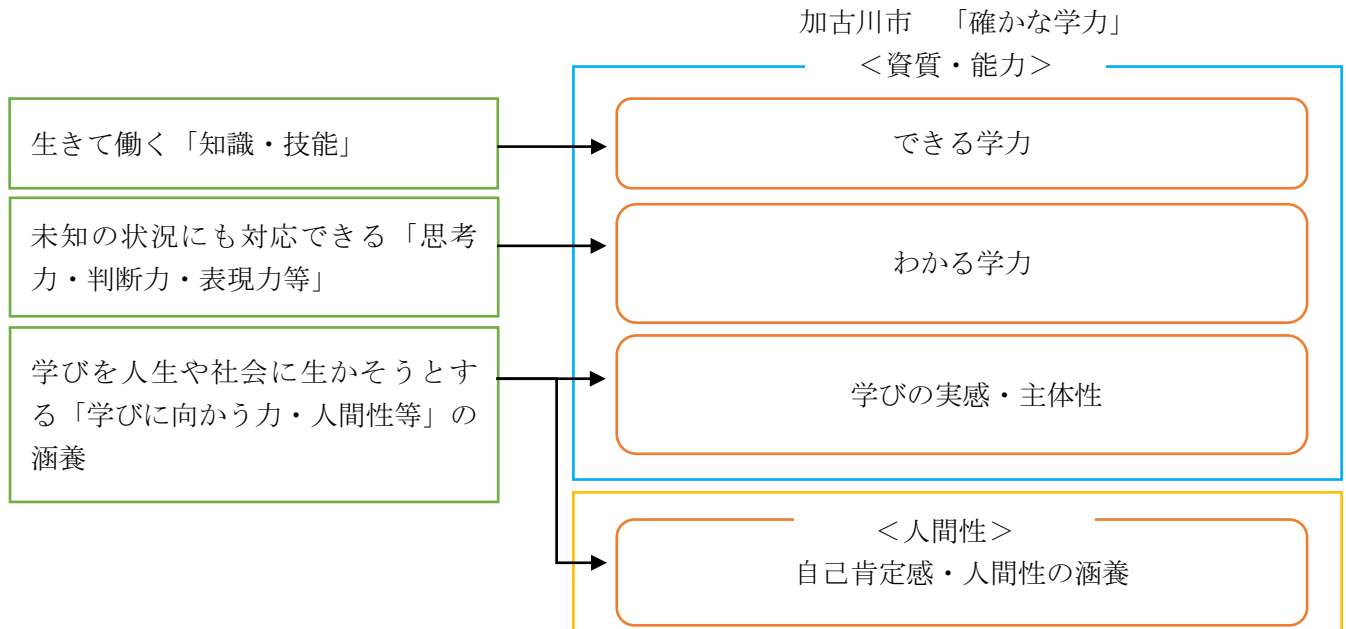
- 何を理解しているか、何ができるか
(生きて働く「知識・技能」の習得)
- 理解していること・できることをどう使うか
(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)
- どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)

3 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。

4 本市児童生徒に身に付けさせたい「確かな学力」

加古川市教育委員会は、就学前教育との連携を基盤としつつ、義務教育9年間を通して、本市児童生徒に身に付けさせることが必要と考える「確かな学力」を以下の4つに整理します。



※「できる学力」とは

学年や発達段階に応じて、身に付けておきたい基礎的・基本的な「知識・技能」と捉え、各学年で確実に習得させる必要があります。

※「わかる学力」とは

今までに習得した知識や技能、様々な経験を関連づけて考え、多様な意見や解法を見出す「考える力」、根拠や理由を基に自身の考えを持つ「判断する力」、思考の過程を自分の言葉で表す「表現する力」、他者と協同しながら課題解決に取り組み、より本質的な深い学びへ探究していく「探究する力」と捉えています。後述の協同的探究学習に基づく授業づくりと発問等の工夫を行うことで、児童生徒の苦手とする「わかる学力」向上に向けた授業づくりができます。

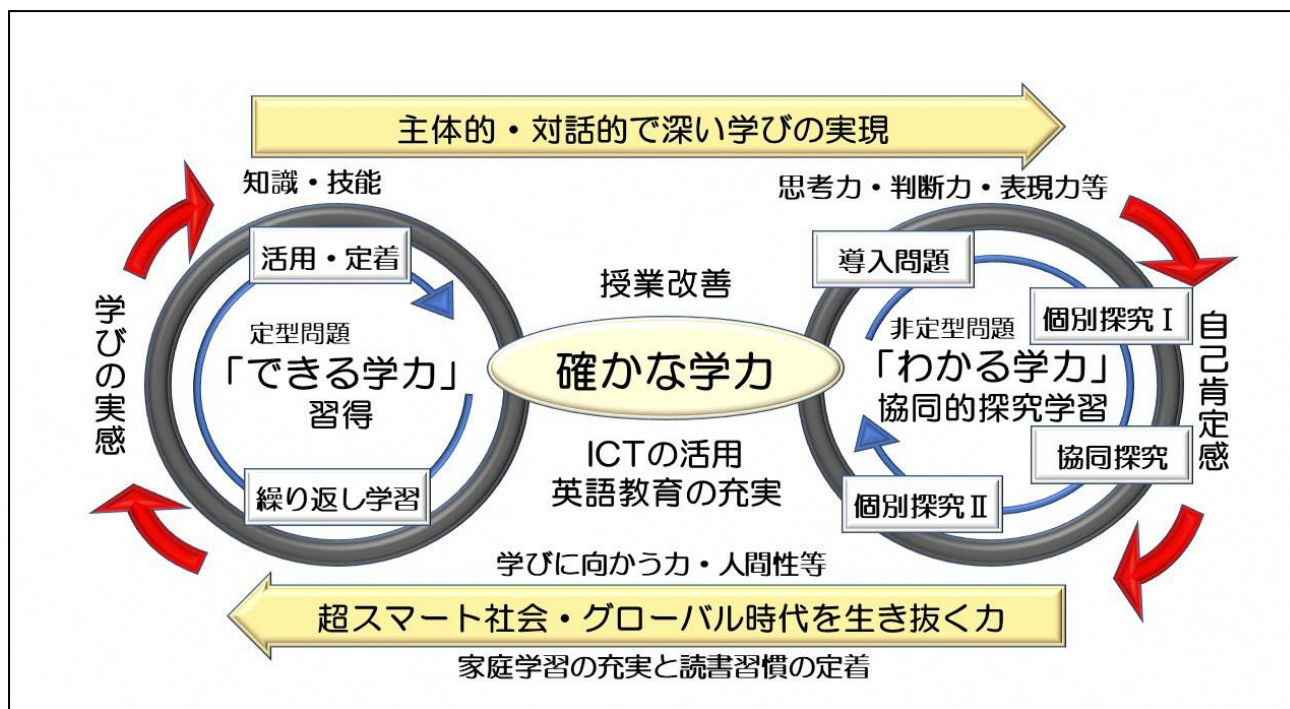
※「学びの実感」とは

児童生徒が主体的・対話的で深い学びを通して、学ぶ意義や価値を見出し、さらに学ぼうとする意欲を導くことが大切です。そのためには、一人一人の学習状況を丁寧に見取りながら指導に生かす評価を行い、児童生徒に自らの学びや変容を自覚させることが大切です。

※「人間性等の涵養」とは

各教科等の指導を含めて学校の教育活動の全体を通して情意や態度等に関わる資質・能力を育ててきたこれまでの学校教育の特長を生かし、さらに、児童生徒一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、個性を生かし、粘り強く取り組み、自己の感情や行動を統制する力、多様な他者とともに新たな考えを見出し、本質を追究する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等の育成が必要となります。

<授業における学力向上モデル（イメージ図）>



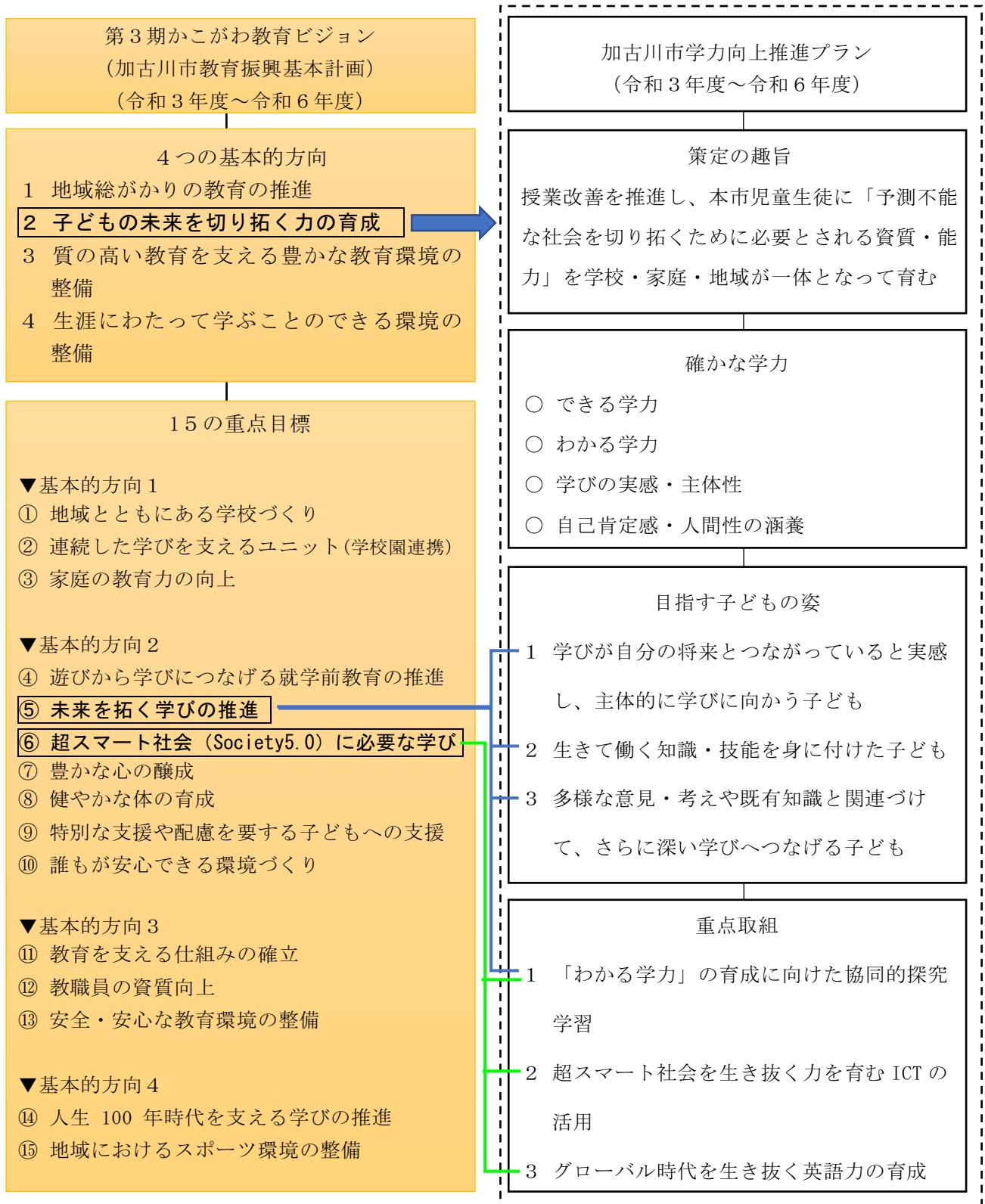
児童生徒が「確かな学力」を身に付けるには、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を行い、グローバルな超スマート社会を生き抜く力を育むために ICT の活用や英語教育の充実を図っていくことが求められています。

本市が目指す、「協同探究学習」を核とした学びの質を高める授業改善の取組は、児童生徒の「わかる学力」を高めると同時に、「自己肯定感」を育てることを目標としています。

そのためには、「できる学力」と「わかる学力」が両輪となって、バランスよく相互に機能し続ける中で、学びに向かう力を育むことができるよう、「授業における学力向上モデル」をイメージしながらカリキュラムを作成し、日々の授業に取り組むことが大切です。

「できる学力」の向上は、関連づけの対象としての知識・技能を高めることで、「わかる学力」の更なる向上に寄与し、一方で「わかる学力」の向上は、「できる学力」の形成を動機づけます。この循環が相互に継続的に作用し、「学びの実感」と「自己肯定感」を高め、学びに向かう力や人間性等の涵養につながります。また、「協同探究」に取り組むことで、他者理解が深まり、授業を通じた人間関係づくりに寄与することができます。

授業者が長期的な視野で、「できる学力」と「わかる学力」の両輪が機能するようイメージし、子どもたちの「確かな学力」の定着を支えていくことが肝要です。



6 目指す子どもの姿

1 学びが自分の将来とつながっていると実感し、主体的に学びに向かう子ども

学びを通じて人と関わる中で、受け身にならず互いの良さを認め合い、力を合わせて困難な課題にも挑戦することは、将来にわたって必ず必要な力です。学ぶ楽しさ、学ぶ意義を実感するとともに、自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付け、未来社会を切り拓く子どもの姿を目指します。

(目標とする評価指標及び数値目標)

・国語、算数(数学)の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ

(平成31年度 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙)

※当てはまる、どちらかと言えば当てはまると回答した児童生徒の割合

国語 小学6年生：92.8%、中学3年生：86.7%

算数(数学) 小学6年生：94.0%、中学3年生：72.4%

↓

☆令和6年度 児童生徒の割合ともに上昇

・平成31年度 全国学力・学習状況調査 記述問題における無解答率の平均値

小学校：国語 8.6%・算数 5.3%

中学校：国語 8.1%・数学 21.6%

↓

☆令和6年度 各教科調査における無解答率の減少

(1) 「できる学力」と「学びの実感・主体性」、「自己肯定感・人間性等の涵養」の関連

- 手続き的知識、スキルが自動化することで、より速く、正しく答えようとする学習意欲を高める。また、「できた」という学びの実感により自信が付き、「自己肯定感」を高める。
- 家庭と連携・協力しながら、計算スキル、漢字学習等のドリル学習を推進し、できる喜びを味わわせる。

(2) 「わかる学力」と「学びの実感・主体性」、「自己肯定感・人間性等の涵養」の関連

- 協同的探究学習を通して児童生徒の興味・関心を高め、知的好奇心を刺激する導入問題や思考を揺さぶる導入問題に対して、粘り強くやり遂げようとする態度を育てることにより、最後まであきらめずに問題解決しようとする力を身に付けさせる。
- 自分の考えや思いが授業等で認められる喜び・安心感を味わわせ、学びの実感(成功体験)を積み重ねることにより、今の自分を肯定的に捉える「自己肯定感」を高めるとともに、「もっと知りたい」等の知的好奇心を育み、さらなる主体的な学びにつなげる。
- 家庭と連携・協力しながら、調べ学習や体験活動、読書活動等を推進し、予習・復習の進め方の指導や宿題や課題の設定を工夫して、家庭学習も推進する。

2 生きて働く知識・技能を身に付けた子ども

生きて働く「知識・技能」を習得するためには、既に持っている知識や経験と結び付けながら更新を重ね、それらが断片的な理解にならないようにする必要があります。また、「知識や技能をどのように使うか」にまで考えを発展させ、実際にそれらを活用できるようにすることが大切です。

知識・技能を社会生活で活用していこうとする態度の育成に向けて、各教科における基礎的・基本的な「知識・技能」を身に付けた子どもの姿を目指します。

(目標とする評価指標及び数値目標)

- ・国語、算数(数学)の内容はよく分かりますか

(平成31年度 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙)

※当てはまる、どちらかと言えば当てはまると回答した児童生徒の割合

国語 小学6年生：85.2%、中学3年生：73.9%

算数(数学) 小学6年生：82.5%、中学3年生：68.1%

↓

☆令和6年度 児童生徒の割合ともに上昇

(1) 「できる学力」の育成に向けた授業づくり

□学習の基盤となる知識・技能について、意味を理解させながら教え導く。

□解法の手順や意味を確認したり、観察しているものや資料等から読み取ることができる内容を発表させたりしながら、整理する。

(例) まず……、次に……、最後は……。

(例) ここは「〇〇」と言います。答えは「〇〇」です。

□習得した解法やパターンを用いて解決できる適用問題を繰り返し解かせたり、本時の授業のまとめをしたりして、知識・技能の定着を図る。

※習得・定着が難しい児童生徒には、個別に指導や支援を行う。

【平成30年度 全国学力・学習状況調査の平均正答率と児童生徒質問紙のクロス集計より】

○算数(数学)の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけ(根拠)を理解するようにしていますか

・上段…「当てはまる」と回答した児童生徒(小：43.7%、中：24.3%)の平均正答率

・下段…「当てはまらない」と回答した児童生徒(小：5.2%、中：11.4%)の平均正答率

<小学校>

国語A		算数A	
73.7%	ポイント差	67.4%	ポイント差
58.5%	15.2	49.9%	17.5

<中学校>

国語A		数学A	
80.9%	ポイント差	78.7%	ポイント差
69.4%	11.5	55.1%	23.6

(2) つまずきの把握と補充の強化、反復学習による定着

□学習内容の定着状況を把握し、つまずいている内容に立ち戻る学び直しを工夫する。

□学習内容の定着、習熟を図るために、補充学習や反復学習を行う。

(例) 朝、放課後、長期休業等の時間を活用する。

(例) 家庭学習との連携を図る。ドリルやワークを活用する。

3 多様な意見・考えや既有知識と関連づけて、さらに深い学びへつなげる子ども

これからの多様化する社会において、異なる意見や考えの良さやすばらしさを認め合うことは大変重要です。それらの意見を関連づけながら自分の考えにも取り入れ、自ら目的を持って思考し、自分の知識・技能、様々な経験を関連づけ、筋道立てて考え、本質を理解して解法を導き出す能力は、これから変化していく社会において必要な力です。論理的思考力を駆使し、自分で物事を判断するとともに、自分の思いや考えを伝えたい相手にわかりやすく伝えることのできる子ども、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等である「わかる学力」を身に付けた子どもの姿を目指します。

また、学びの過程において、一人一人、それぞれの意見・考えを尊重する学級の風土は、児童生徒の自己肯定感を育むことにもつながります。

(目標とする評価指標及び数値目標)

・授業で学んだことを、他の学習に生かしていますか

(平成 31 年度 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙)

※当てはまる、どちらかと言えば当てはまると回答した児童生徒の割合

小学 6 年生：85.1%、中学 3 年生：74.5%

↓

☆令和 6 年度 児童の割合 90%以上、生徒の割合 80%以上

・学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか (平成 31 年度 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙)

※当てはまる、どちらかと言えば当てはまると回答した児童生徒の割合

小学 6 年生：78.0%、中学 3 年生：71.6%

↓

☆令和 6 年度 児童の割合 85%以上、生徒の割合 80%以上

(1) 「わかる学力」の育成に向けた授業づくり

□協同的探究学習の理念に基づいた授業づくりを全教科で充実させる。

※詳細は、重点取組 1 「「わかる学力」の育成に向けた協同的探究学習」に記載する。

□協同的探究学習における「わかる学力」育成に向けて

- ・個別探究において、言葉や数、図や式などを使って自分の考えを表現し、根拠や理由を書く活動を充実させる。
- ・協同探究場面において、自分の考えを伝えるだけでなく、他者の意見を的確に理解し、さらに自分の考えを再考して分かりやすく伝えるなど、自分の考えと他者の意見を関連づけながら整理して発言させる。

(2) 社会の中で必要な汎用的能力である「ことばの力」の育成

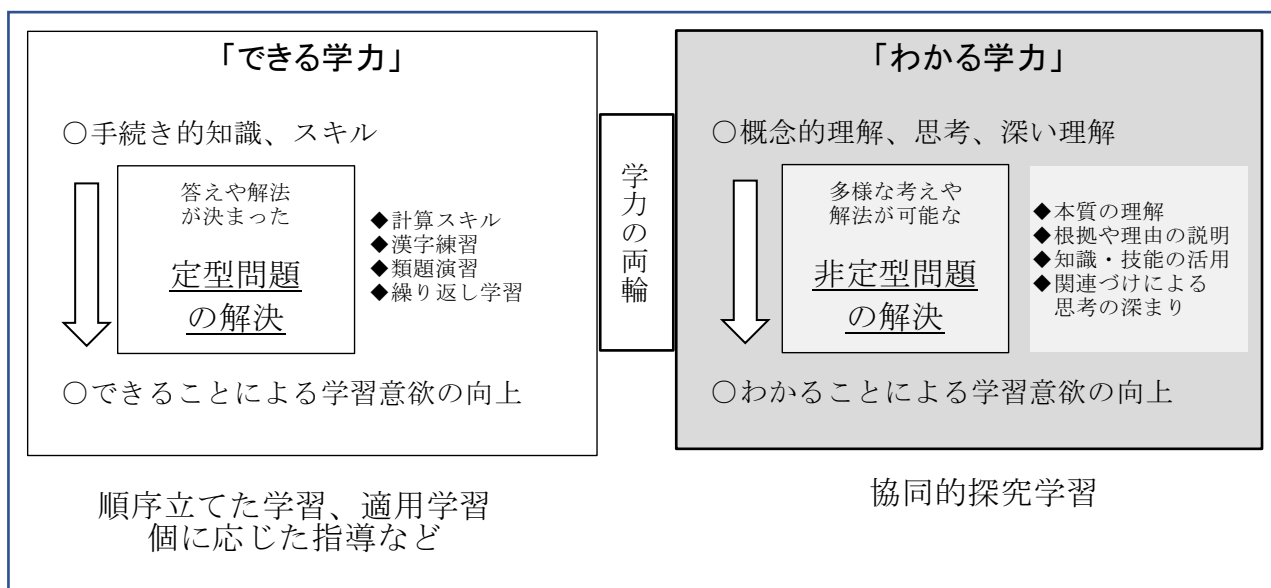
□自分の考えをまとめる言語に関する能力を高めるため、各教科等で言語活動を充実させる。

□資料や文章、根拠や理由を基に、話や文章の組立てを工夫して、自分の言葉で最後まで表現させる。

□「ことばの力」育成プログラムに基づき、「聞く」「読む」「話す」「書く」活動を総合的に取り入れた実践を行う。

7 重点取組 1 「わかる学力」の育成に向けた協同的探究学習

(1) 「できる学力」と「わかる学力」との関連



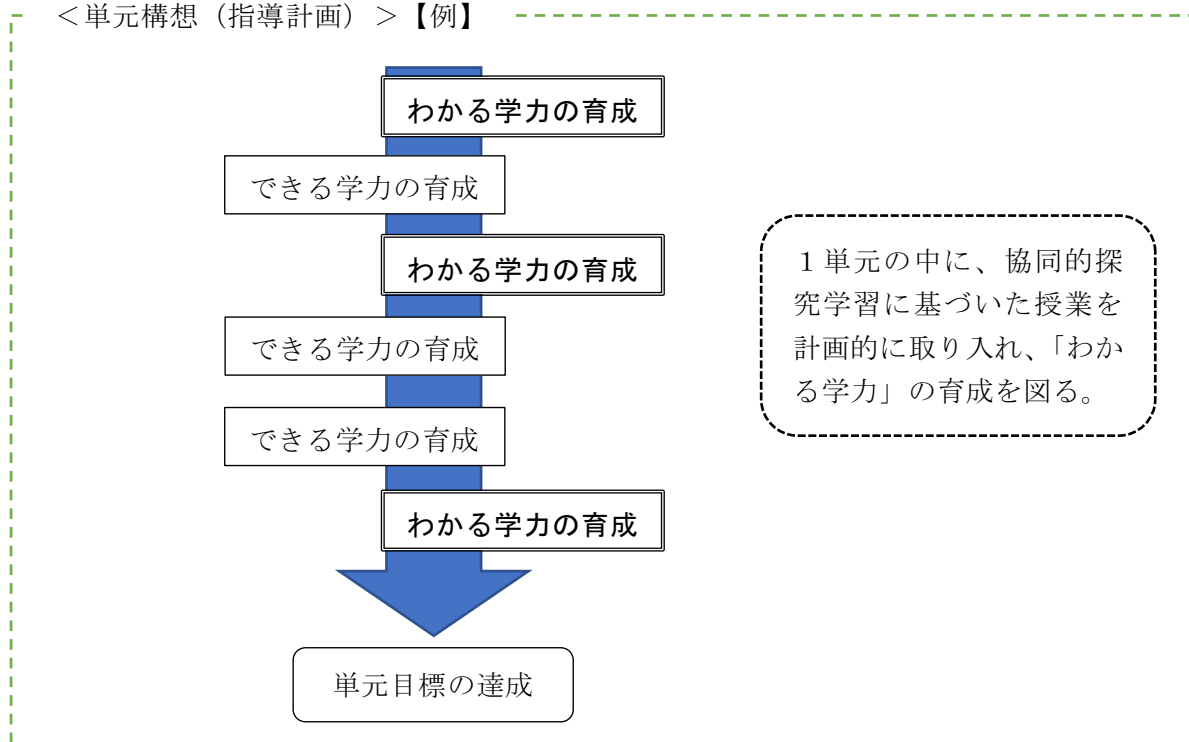
(2) 「わかる学力」の育成に向けた「協同的探究学習」を核とした授業づくり

<指導計画>

□ 単元構想（単元の指導計画）の工夫

- ◎ 「できる学力」の定着と「わかる学力」の育成に向けた授業づくりを意識し、指導法が異なっていることを踏まえ、単元構想（指導計画）を考える。

<単元構想（指導計画）> 【例】



<授業の流れ>

□ 導入問題の提示

◎非定型問題の提示…多様な考えや解法が可能な問題を提示する。

- ・一人一人が多様にアプローチでき、多様な考えや解法が可能な問題を提示する。
- ・多様な知識を関連づけ、自分なりに解決可能な問題を提示する。
- ・主体的に解決できる日常的な問題を提示する。
- ・教材や単元の本質に迫ることを前提とした上で、問題解決に必要な手続き的知識・スキルや事實的知識を必要最小限度にする。
※問題を単純に簡単にすることではない。



- ・やってみよう
- ・調べてみよう
- ・解決しよう

□ 個別探究Ⅰ場面の設定

◎思考のプロセス（過程）を重視する。

◎一人一人の根拠や理由を大切にし、自分の考えを持たせる。

- ・一人一人がじっくり考える時間を確保する。
- ・多面的な考え、多様な解法を発見させる。
- ・個人内で既有知識や自分の日常経験などと関連づけて考えさせる。



- ・自分の力で
- ・これまでの学習や経験と結びつけて

□ 協同探究場面の設定

◎学級全体で多様な考えや解法を発表させ、一人一人の考えや解法、思考の過程を関連づけさせる。

◎共通点、類似点、相違点、根拠や理由、様々な気づきを出し合わせる。

- ・個人間の関連づけ、既有知識や日常経験と関連づけさせる。
- ・児童生徒の言葉や表現を尊重し、根拠や理由を説明させる。
- ・教師がまとめたり、整理したりするのではなく、児童生徒が共通点や相違点などに気付くよう、教師が支援する。

◎各教科の「見方・考え方」を働かせる追究型発問（児童生徒の発言を生かした追究型発問〔切り返し型〕・意図的に深い学びにつなげる追究型発問〔設定型〕）を設定し、本質に向けて学びを深めさせる。



- ・新しい考えに触れ
- ・互いの良さに気づき

□ 展開問題の提示と個別探究Ⅱ場面の設定

◎協同探究場面での意見や考えを生かし、再度、自力解決を行わせる。

◎展開問題で本時の学習内容の本質やねらいに迫らせる。

- ・協同探究場面で整理・分類された考えや解法から、選択・統合しながら、展開問題に取り組み、学習内容の理解を深めさせる。



- ・学びの深まり
- ・もっとやってみよう
- ・もっと調べてみよう



8 重点取組 2 超スマート社会を生き抜く力を育む ICT の活用

将来の予測が難しい社会において、子どもたちが情報を主体的に捉えながら、何が重要かを考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくといった「情報活用能力」を育成することが重要です。さらに、一人一台端末が整備されたことを受け、ICT を授業や日常生活に活用できるようにしていくことも重要です。

「すぐにでも」「どの教科でも」「誰でも」使える ICT 環境を最大限活用し、全ての子どもたちが超スマート社会を主体的に生きる力を育むために、各教科等のねらいや学習スタイルに応じて、学習活動の中に ICT を効果的に活用する場面を取り入れ、誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びを学校現場で持続的に実現させるとともに、子どもたちの情報活用能力の向上を図ります。

(目標とする評価指標及び数値目標)

- ・前年度までに受けた授業時に ICT を活用した頻度はどのくらいですか

(平成 31 年度 全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙)

※ほぼ毎日と回答した児童生徒の割合

小学 6 年生 : 5.7%、中学 3 年生 : 3.1%



☆令和 6 年度 児童生徒の割合ともに 100%

(1) 学習活動での活用

学習スタイル	可能となる学習活動
一斉学習	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中でも一人一人の反応を把握できる。 ・クラスを越えて授業を行うことが可能となる。 ⇒子どもたち一人一人の反応を踏まえた授業展開が可能となる。
個別学習 ⇒「できる学力」の育成に効果	<ul style="list-style-type: none"> ・学習コンテンツを活用した習熟度別の学習ができる。 ・繰り返しや巻き戻しての学習ができるので、定型問題に対応する知識が定着しやすい。 ・個人の学習履歴が自動的に記録できる。 ⇒一人一人の教育的ニーズ・理解度に応じた個別学習など、個に応じた指導が可能となる。
協働学習	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が記事や動画等の情報を集め、独自の視点で情報を編集できる。 ・各自の考えや意見を即時に共有し、意見整理を円滑に行うことができる。 (協同的探究学習における協同探究場面で活用可能) ・個々の考えを可視化し、関連づけを学級全体で行うことができる。 (協同的探究学習における協同探究場面で活用可能) ⇒全ての子どもが情報の編集を経験しつつ、多様な意見にも即時に触れることができる。

(2) 「一人一台端末」の活用によって充実する学習

- 調べ学習 課題や目的に応じて、インターネット等を使い、様々な情報を主体的に収集・整理・分析
- 可視化 体育科における体の動かし方など、個人の動きや表現を録画し、可視化することによる学習の充実
- 表現・製作 推敲しながら長文の作成や写真や動画等を用いた多様な資料・作品の製作
- 遠隔教育 海外等と連携し、テレビ会議による学びや交流
- 情報モラル 適切に情報を扱う場面（情報発信・収集）における、トラブルを招かない使い方などの学習機会の充実
- 家庭学習 学習コンテンツを繰り返し活用するなど、自分の習熟度に合わせた学習

(3) 大型提示装置の活用

- 大型提示装置を活用し、資料や解法の手順、ノートやプリントを大きく提示するなど、児童生徒に自分の考えを順序立てて説明させる。
- 電子黒板機能付き大型提示装置を活用し、拡大・縮小したり、色を付け強調したりするなど、効果的な指導に役立てる。
- 協同探究場面において関連づけを図る場合には、板書に個々の考えが残るよう工夫する。

(4) スマートスクール推進モデル校による研究推進

- ICTを活用した教育を先進的に推進するとともに、学力向上に向けた授業におけるICTの効果的な活用方法の開発と検証を行う。
- 協同的探究学習におけるICTの効果的な活用について研究を進める。
- 研究の成果と検証の結果については、公開授業等を通して市全体に、広く発信する。

(5) ICT教育及びICT機器の操作に係る教員研修の充実

- 視聴覚・情報教育研究部会及びICT担当者会と教育委員会との連携
 - ・学ぶ意欲を高め、確かな学力を育む授業づくりについて研究を行い、各校での取組を情報共有するなど、授業におけるICTの効果的な活用方法についての研究を推進する。
 - ・教科等横断的にICTを活用できる教員の指導力を向上させ、ICT教育とプログラミング教育の充実を図る。
- 教員研修の充実
 - ・一人一台端末、大型提示装置、学習コンテンツ等、ICTの効果的な活用を目指した研修を実施し、ICT活用指導力の向上を図る。
- 校内研究体制の充実
 - ・全校に校内ICT推進委員会を位置付け、ICT推進担当者のコーディネートのもと、授業におけるICT活用の研究を推進する。

9 重点取組3 グローバル時代を生き抜く英語力の育成

あらゆる分野で国際化が進展している今、多様な人々との共存や国際協力はさらに重要性を増してきています。

これからのグローバル社会に必要な、生きて働く英語力を育成するためには、「自分の思いや考えを、平易な語彙や既習の文法を活用して英文を構成し表現する等、自分の持てる力で相手に英語で伝えることができる力」、すなわち英語における「わかる学力」（思考力・判断力・表現力等）の育成を図っていく必要があります。

そこで、日常的に英語に触れ、英語を使い、積極的にコミュニケーションを図る機会を充実させるとともに、児童生徒の英語力を適切に把握・分析し、授業改善に取り組んでいきます。

（目標とする評価指標及び数値目標）

- ・中学校卒業段階で CEFR A1 相当以上の生徒の割合（平成 31 年度）

43.9%



☆令和 6 年度 60%

※ CEFR（セファール）とは、外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠で、外国語の習得状況を示す際に用いられる国際的ガイドラインのこと。6 段階の共通参照レベルがあり、その中で、A は基礎段階であり、CEFR A1 は実用英語技能検定 3 級レベル相当。

- ・チェックリスト（自己評価）における達成率（平成 31 年度）

小学生：84.4%、中学生：65.8%



☆令和 6 年度 児童の割合 95%以上、生徒の割合 80%以上

（1）ALT の活用

- 児童生徒が生きた英語に触れる機会の充実を図る。
- 児童生徒が幅広い表現方法を身に付けることができるよう、ALT との会話や交流を通して、多様な表現方法に触れる機会の充実を図る。
- 小学校では、英語でやり取りする楽しさを味わうとともに、自分の知っている英語やジェスチャーを使ってやり取りする力を育成する。中学校では、即興性のあるやり取りを通して、既習知識を活用して、自分の考えを伝えることができる英語力の育成を図る。
- 学期ごとのパフォーマンステスト（スピーキングテスト）や、ALT と 1 対 1 で会話する ENJOY トーキング（小学校）を行い、授業の中での言語活動の充実や学習意欲の向上につなげる。
- 異文化への理解を深めるとともに、日本のすばらしさへの気付きを深める。



(2) ICT の活用

- 学習コンテンツを活用し、習熟度や興味・関心に応じた学習の充実を図る。
- オンラインで遠隔地の児童生徒等との交流が可能となり、これまで以上に、幅広い英語教育、国際理解教育を推進する。

(3) 授業改善につなげる取組

- パフォーマンステストやチェックシートを実施し、児童生徒の振り返りによる自己評価を行う。
- 外部試験の導入を進め、客観的評価に基づいた分析を行う。
- 児童生徒が多様な表現方法を身に付けることができるよう、ALT とのコミュニケーションを図る機会を充実させるとともに、表現方法についてアドバイスする場面を設定する。

(4) 教員の指導力向上を目指した研修の充実

- ALT を活用した校内研修を充実させ、指導力向上を図る。
- 小中合同での授業研究など、小中連携した英語教育のあり方について研究を進める。
- 児童生徒が既有知識を活用して表現する力を育成できるよう、外国語（英語）科における協同的探究学習について研修を深める。

10 児童生徒の学びを支える環境づくり

1 家庭との連携

児童生徒の学力向上に向けて、学校での学びと家庭学習とがつながることが大変効果的です。そのためにも、学校での学習活動やその目標を共有することはもちろん、家庭でどのような学習が必要か等、学校からの情報発信が必要です。

(1) 家庭学習の定着

- 学校の授業で「わかったこと」「できたこと」と家庭での宿題や予習、復習を自分で計画的に行う自主的な学習態度の育成に向け、計画的に時間を使い、メリハリのある家庭生活を送らせる。
- 習い事や部活動のある日など、スケジュールに合わせて自分で計画を立て、学習に向かわせる。
- 学習コンテンツなど一人一台端末を活用し、自分の習熟度に合わせた学習に取り組む。

【平成 31 年度 全国学力・学習状況調査の平均正答率と児童生徒質問紙のクロス集計より】

○家で自分で計画を立てて勉強をしていますか

- ・上段…「している」と回答した児童生徒（小：30.7%、中：12.1%）の平均正答率
- ・下段…「全くしていない」と回答した児童生徒（小：5.4%、中：12.3%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
63.6%	ポイント差	67.8%	ポイント差
53.3%	10.3	61.4%	6.4

<中学校>

国語		数学		英語	
76.5%	ポイント差	66.7%	ポイント差	61.6%	ポイント差
65.8%	10.7	52.6%	14.1	50.3%	11.3

(2) 家庭における家族間の対話と支えの充実

<生活場面>

- 子どもの計画や約束など、家族で相談しながら子ども自身に決めさせ、最後までやり遂げさせる。
- 家族で一緒に食事・運動を行ったり、家族で団らんしたりする中で、学校や友だちのことを話題にして会話をする。

<学習場面>

- 与えられた課題をこなす学習から、自分で目標を決めて取り組む学習へと発展できるよう、学校と協力して、自ら学びに向かう力を身に付けさせる。
- 学校や友だちのこと、授業のこと等を話題にして、子どもと対話しながら、学習に向かわせる。

2 読書習慣の定着に向けた環境づくり

朝の読書、読書週間、読み聞かせ等の読書活動を充実させ、学級文庫や図書室、市立図書館と連携を図りながら、本に触れる機会を充実させ、読書に親しむ環境づくりを行う。

□本や図鑑、新聞などを手に取り、興味・関心や感動の幅を広げ、自分の生き方や考え方を深めるなど、読書習慣や内容を深く読み取る力を身に付けさせる。

□手に取りやすい場所に、本や図鑑、新聞などを置き、すぐに読むことのできる環境を整える。

【平成 31 年度 全国学力・学習状況調査の平均正答率と児童生徒質問紙のクロス集計より】

○読書は好きですか

・上段…「当てはまる」と回答した児童生徒（小：45.9%、中 38.5%）の平均正答率

・下段…「当てはまらない」と回答した児童生徒（小：7.2%、中 12.1%）の平均正答率

<小学校>

国語		算数	
65.3%	ポイント差	69.3%	ポイント差
47.6%	17.7	56.3%	13.0

<中学校>

国語		数学		英語	
78.6%	ポイント差	66.0%	ポイント差	60.0%	ポイント差
57.0%	21.6	47.6%	18.4	49.2%	10.8

3 組織的な研究・研修体制の構築

学びの質を高める授業改善を行っていくには、個々の教職員による取組だけでなく、学校全体、教科・教科外部会等が組織的・計画的に取り組んでいくことが重要です。

また、これまでの校種間連携や家庭・地域とのつながりを生かし、小中合同研修会や中学校区合同研修会の開催、地域人材による教育活動支援のさらなる充実を図っていきます。

(1) 学力向上推進委員会の設置

- 本市の児童生徒の学力・学習・生活状況を分析し、その実態に即した学力向上策の検討や提案を行う。
- 協同的探究学習に基づく授業方法についての研究に関することや市指定研究校における取組の情報交換に関する事など、学力向上において必要な事項に関する事を協議する。

(2) 市指定研究推進体制の充実

①研究推進校の指定

- 先進的な研究を行う「協同的探究学習パイロット校」に引き続き、継続した実践研究を通して、協同的探究学習の単元や教材の開発及び「わかる学力」を高めるための効果的な指導法を中心に研究・検証を行う。
- 校内研究において、大学教授や指導主事等が直接指導助言を行い、校内の研究体制を構築し、授業研究を推進する。

②実践協力校の指定

- 全国学力・学習状況調査結果の分析に加え、大学教授の指導のもと、「わかる学力」を含めた学力向上に関する評価方法や効果測定（数学的思考に関する記述型調査等）について、教科等による授業実践を通して、検証を行う。
- 校内研究において、大学教授や指導主事等が直接指導助言を行い、校内の研究体制を構築し、授業研究を推進する。

③スマートスクール推進モデル校の指定

- ICTを活用した教育を先進的に推進するとともに、学力向上に向けた授業におけるICT機器の効果的な活用方法や、協同的探究学習におけるICTの活用方法の開発と検証を行う。
- 校内研究において、大学教授や指導主事等が直接指導助言を行い、校内の研究体制を構築し、授業研究を推進する。

(3) 授業力向上に向けた教員研修・研究の充実

①教科・教科外部会（小・中・養護学校長会）

- 各教科・教科外部会で研究主題を決め、協同的探究学習に基づく授業研究、ICTの活用、児童生徒の学力向上、健全育成、教員の授業力や指導力向上に向け、研究を重ねる。
- 先進的な研究発表会等に参加し、各部会で情報共有を行い、さらなる研究を推進する。

②市主催研修会等の充実

ア 学力向上推進担当者研修会の開催

- 本市の学力向上施策の推進を図るとともに、各校の効果的な取組を共有する。
- 公開授業参観及び研究協議会等に出席し、「わかる学力」を高める指導体制の在り方、「協同的探究学習」について理解を深める。
- 各校の研究における課題解決に向けて、中学校区ごとに協議する場面を設定し、市全体での授業改善を進める。

イ 各種研修講座

- 教職員の資質・指導力の向上と研究意欲の高揚を図るため、キャリアステージや職責に応じた実践的な研修講座を開催する。
- 若手教員及び学力向上推進担当教員を対象に、大学教授の指導のもと、協同的探究学習を用いた授業力の向上を目指した研修を実施する。

ウ 研究員活動

- 研究員は任命された期間、教育委員会及び学校と連携し、教育課題の解決に向けた実践研究を行う。
- 研究成果は、研究紀要にまとめ、研究発表会で報告する。

③校内研究体制の充実

- 全校に「学力向上推進担当者」を位置付け、学力向上に向けた校内研究体制づくりを推進する。
- 「協同的探究学習」を核とした授業づくりによる「わかる学力」の育成と、知識・技能の確実な習得に向けた授業づくりによる「できる学力」の定着を図るバランスの良い授業づくりを行う。
- 管理職と学力向上推進担当者、研究推進担当等が校内の授業研究体制を整え、相互参観や研究協議を行うことで、組織的な研究と研修を推進する。また、OJT や研修等の中で、管理職やベテラン教職員が指導助言などを通して指導技術を伝承し、組織的な授業力及び指導力の向上を図る。

(4) 学校支援の充実

- 指導主事等による授業参観及び指導助言を通して、各校の課題の解消や教職員の指導力の向上を図る。
- スーパーティーチャーや教科等指導員（県）等を活用し、熟練した指導方法や専門的な指導方法を身に付けた教員 OB や専門性の高い教職員により、授業力及び指導力等の向上を図る。
- 学校園連携ユニットを活用し、小学校と中学校が連携し、互いの指導方法の良さを取り入れながら研究を進め、児童生徒の学力向上を図る。
- 学校園支援ボランティアや家庭や地域の支援を通して、体験活動や学習活動、読書活動や読書環境の整備など、各校の教育活動を充実させる。